中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

NIHON BUNKA

2025 年度活動報告書

Vol.7

ごあいさつ

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト長
辻本雅史

本プロジェクトは、飯吉厚夫前理事長（現名誉総長）の意を受けて、2019 年に活動を開始しました。大学の文理を越えた教員と職員で構成されたメンバーに加えて、現在は「日本伝統文化探究会」の学生たちとも連携しながら、活動を進めております。

本活動のおもな目的は以下の通りです。第一に、学生たちが質の高いほんものの日本の伝統文化に触れること、それにより、すぐれた日本の文化伝統に対する理解を深め、教養豊かな国際人に育ってほしいこと。第二に、文理融合の総合大学として、文化性豊かな中部大学の校風づくりに貢献すること。第三に、併設校とも連携することで、学園の文化的一体感を醸成すること。第四に、研究と教育に加えて、積極的な文化発信を行うことによって、本学が「知と文化の拠点」として、広く地域社会に認知され信頼されること。

2025 年度は、日本舞踊西川流第四世家元西川千雅師による「日本舞踊公演会」、落語の登竜亭獅籠師と講談の旭堂鱗林師の競演による「伝統話芸の世界」（中部大学春日丘中学校参加）は、例年通り実施しました。そのほか新たに「花鏡野外能」を人文学部と共催で企画しました。人文学部中庭「花鏡の庭」は四方を学舎で囲われた知る人の少ない名園です。その芝生を舞台に、第一部は加藤いつみ氏企画の「一節切×狂言」が、第二部は観世流能楽師久田三津子師による「羽衣」が演じられました。併せて日本伝統文化探究会による能面と能楽本および久田家の能衣裳の展示も行いました。天候の懸念のほかに、「舞台」設営や鑑賞者の「見所」など、多くに工夫が必要でした。スリルに満ちた挑戦でしたが、多くの学生、教職員のほか、地域の方々の参加も得て、盛況でした。

幸いにも、本プロジェクトは、全国的にみても類例をみない本学独自の特色ある活動として評価されつつあります。それにつけても、名古屋を拠点にした著名な文化人の方々のご協力と、理事長・学長以下の本学教職員のご支援あってのことです。各位にあらためて感謝申し上げます。これから何よりも期待することは、学生みずからが活動主体となって、本活動がより大きく育っていってくれることです。

本プロジェクトの詳細については、本学ホームページに、活動の動画も含め掲載しております[https://pfs.chubu.ac.jp/project/culture-project/]。併せてご覧いただければ幸いです。引き続き、皆さまのより一層のご支援とご協力をお願いいたします。

2026 年 3 月

目次

ごあいさつ
１. 日本舞踊公演会
２. 伝統話芸の世界
３. 花鏡野外能　能楽・一節切尺八（特別企画）
４. 日本伝統文化講座
⑴ 春学期：「日本の歴史と文化」
⑵ 秋学期：SDGs プロジェクト科目（お稽古）
コラム　「花鏡野外能」における能面展示
～文理融合大学の強みを活かして～
５. 共催・協力事業
⑴ 源氏物語屏風・講座（中部大学アクティブアゲインカレッジ）
⑵ 着物の着付け講座
６. 学園活動
⑴ 春日丘中学校「江戸時代の連句を巻こう」（中大連携）
⑵ 日本伝統文化プロジェクト室の活用
⑶ 中部大学祭への出展
７. 学外活動
⑴ 「えなしこどもフェスタ 2025」への出展
⑵ 恵那市立長島小学校での教育サポート活動
⑶ 全国大学俳句選手権大会
８. プロジェクトメンバー
編集後記

1．日本舞踊公演会

7 月 9 日（水）に三浦幸平メモリアルホールにおいて日本舞踊西川流家元西川千雅先生により、日本舞踊の公演会が行われた。参加者は、学生 189 名（聴講生 2 名含む）、教職員 5 名、学外者 10 名、計 204 名であった。今回は「自分の身体の中に眠る、日本の伝統」と題して講演された。西川千雅先生は、軽妙なトークの中で自在に聴衆を魅了していた。聴衆にさまざまな手拍子などをさせながら、日本舞踊の基本となる動きを自然に導き出していた。踊っている中で心が開かれていく感覚を実演の中で紹介していた。また、自らの化粧の様子を動画で見せながら具体的に説明をされた。そして「獅子」を西川カーク氏とともに舞っている様子を動画で見てもらった後、聴衆にカメラを持って舞台にあがってもらい、間近で「宝船」を舞いながら、実感として舞うことを感じてもらい、写真や動画で撮ってもらっていた。最後に「NOSS」という西川流の身体と結びついた舞を聴衆にも実演してもらうことで公演は終了した。日本文化がいかに身体感覚と結びついたものであるかが伝わる公演会であった。

公演会の様子

聴衆との一体化

至近距離で交流

「宝船」を実演

撮影サービス付

皆で西川流舞踊「NOSS」を実践

２. 伝統話芸の世界

第1部 講談「東山ぞうれっしゃ物語」旭堂鱗林氏
第2部 落語「尾張落語」　　登龍亭獅篭氏

11 月 5 日（水)、三浦幸平メモリアルホールにおいて、「伝統話芸の世界」と題して講談と落語の公演が行われた。参加者は、学生 96 名、教職員 13 名、春日丘中学校の生徒 111 名（留学生 4 名を含む)、学外者 11 名、計 231 名であった。

第 1 部の講談は、演目「東山ぞうれっしゃ物語」である。戦後の昭和 24 年（1949)、空襲を逃れ生き残った名古屋市東山動物園のアジアゾウ 2 頭（エルドとマカニー）を見るため、全国から 5 万人以上の子供たちを乗せて走った特別列車の話である。戦時中、猛獣は処分されたが、東山動物園のゾウ 2 頭はスタッフの熱意によって守り抜かれた。これを講談にして語られて、聴衆も聞き入っていた。

第 2 部の落語家である登龍亭獅篭氏の演目は「当日のお楽しみ」とし、まずは落語の指導の時間が設けられた。登龍亭獅篭氏が参加者を募ったところ、まず中部大学の日本語日本文化学科 1 年生の男子が小話の実演をした。また、春日丘中学校の先生が生徒からの推薦により壇上に上がって、扇子をつかっての蕎麦の食べ方の指導を受けた。

その後、江戸落語の「時蕎麦」の尾張版「時きしめん」の実演が行われた。2021 年度より「伝統話芸の世界」に春日丘中学校の生徒が参加するようになり、毎回生徒が高座に上がっていたが、今年度は先生も初めて高座に上がった。先生が参加したり、大学生が参加したりすることによって、落語や講談を身近なものとして感じることのできたイベントであった。

◆学生の感想

生命健康科学部１年男子（抜粋）

「東山ぞうれっしゃ物語」は、一つの物語を語り手の声色と扇子、そして小拍子だけで展開するものであり、講談師の巧みな技術に強く引き込まれた。舞台上には何もないにもかかわらず、語り手の声の抑揚や調子、そして身振り手振りだけで、感動的な物語の情景が頭の中に鮮やかに浮かび上がってくる。また、時折挟まれる小拍子の鳴り響く音、観客の集中力を高め、ドラマチックな展開を強調していた。映像や文字など、他のメディアでは味わえない話芸が持つ圧倒的な表現力を、その場で体感することができた。何百年も前から受け継がれてきた日本の話の文化には、やはり重みがあると感じた。

〈中略〉その後に披露された落語では、一人の落語家が、声色と体の向きを変えるだけで何人もの登場人物を演じ分け、扇子や手ぬぐいを器用に使う技術は、まさに熟練の技だと感心した。特に、きしめんをすする音など、小道具がないにもかかわらず、その描写によって食べ物の温度や香りが感じられるような錯覚を覚えた何気ない話を、あの独特の間やユーモアのセンスで、あんなに面白い話に変えてしまう話術は、職人技だと感じた。今回のイベントに参加して、語りというシンプルな表現手段の中に、これほどまでに豊かな表現の可能性があることに驚きを感じた。　　※原文ママ

講談

落語

先生も高座は初体験

美味しく見せるのも大変…

３. 花鏡野外能　能楽・一節切尺八（特別企画）

10 月 29 日、人文学部の中庭「花鏡の庭」（著名な作庭家で名古屋造形大学名誉教授の岡田憲久氏設計）を舞台に、「花鏡野外能」を開催した。人文学部に共催を得た特別企画である。本プロジェクトとしていささか挑戦的な試みであるため、1 年近く前から準備会を設け、周到に用意を進めてきた。芝生上での能舞台の設営のこととて、さまざまな工夫が必要だった。目付柱など 3 本の柱の作成、橋掛かりの位置とそれを示す松、市販の点滅電球利用した篝火、鏡板代わりの後景等々である。見所としても、芝生の上に直に座る席（敷物の準備）の配置のほか、三方を囲む 1 階から 4 階に至る廊下越しなどの席の設定などにも工夫を要した。なお大学当局には、開催数日前に芝生の刈込や植え込みの手入れなど、種々のご配慮をいただいた。

当日は、人文学部のエントランスホールに、先年寄贈を受けた能面 8 点を「日本伝統文化探究会」の学生によるキャプション付きで展示し、併せて久田師提供の華麗な能衣裳も展示した。最大の懸念事項は当日の天候であった。雨天の場合の対応も準備もしていたが、幸いにも当日はまたとない好天に恵まれ、関係者一同大いに安堵した。飯吉厚夫名誉総長、竹内芳美理事長の両ご夫妻の臨席も得て、冒頭に前島学長からご挨拶をいただき、２部構成のプログラムで開会した。

第一部「一節切尺八×狂言」は、本プロジェクト活動の支援者でもある加藤いつみ氏（一節切研究家、演奏家、名古屋市立大学名誉教授）による企画である。加藤氏の解説付きで「安田」と「ひょうたん節」が「名市大一節切尺八愛好会」および三味線の「三っ音会」によって雅びに演奏された。次いで一節切「ひょうたん節」に合わせて、和泉流狂言師のレジェンド佐藤友彦師（重要無形文化財保持者・総合認定)の洒脱な創作狂言が披露され、そのインタビューも併せて、拍手を浴びた。また第一部は「一節切尺八大森宗勲没 400 周年祭」参加企画であり、そのため千葉県柏市から駆け付けられた相良保之氏（一節切尺八復興第一人者）が特に紹介され、急きょ、情緒溢れる「荒城の月」が演奏された。多くの情報が詰まった第一部であった。

第二部は観世流能楽「羽衣」である。シテの久田三津子師（重要無形文化財保持者・総合認定）は、久田勘鷗師と共に名古屋観世会を牽引する重鎮で、長らく本学に貢献していただいている。囃子方の笛や大鼓・小鼓の演奏と共に、華やかなシテ（天女）が登場すると、空気が一瞬のうちに緊張感に満ちた幽玄の世界に転じた。日ごろ学生たちの声が飛び交う中庭を異次元の空間に転じる、この力こそ能楽の醍醐味である。なお地謡には、本学の小川順子教授、名古屋大学の飯田祐子教授および名古屋大学宝生会学生の皆さんの参加を得た。

参加人数は、学生 154 名、教職員 34 名、学外参加者 77 名、総計 265 名であった。人文学部では、授業の一部に組み込み、教育活動にも活用している。不安を抱えての挑

戦であったが、加藤いつみ氏、佐藤友彦師、久田三津子師の芸の力と、連携して活動する日本伝統文化探究会の学生グループや教職員スタッフのご協力、大学管財部のご支援などにより、実りある成果を上げることができた。

加藤いつみ氏

佐藤友彦師

夕暮れの幻想的な野外能

人文学部全体が会場に

◆学生の感想

人文学部１年男子（抜粋）

まず舞台全体の“静けさ”がとても印象的でした。現代の舞台みたいに音や照明で盛り上げるわけでもなく、むしろ静けさがちゃんと空気を作っていて、観客もその中に引き込まれていく感じがありました。何も始まっていないのに、すでに「これから特別な時間が始まるんだな」という雰囲気が伝わってきました。〈中略〉中でも一番心に残ったのは天女の舞の場面です。袖を大きく広げる動きが本当に風を含んでいるように見えて、ふわっと浮くような軽さがあり、まるで雲の上で舞っているみたいでした。資料で読んだ「月の都」や「天上の世界」の描写も、文字の時よりずっとイメージしやすくなっていて、舞と音楽が合わさるだけでこんなに世界が立ち上がるのかと驚きました。笛や鼓の音も空気を引き締めていて、舞の美しさをより際立たせていたと思います。

事前に資料を読んでいたおかげで、「この台詞の意味ってこういうことだったんだ」と気づく瞬間が多く、文章と実際の舞台がつながっていくのも面白かったです。能のような古典芸能は難しいと思いがちでしたが、むしろストーリーのシンプルさやゆったりした時間の流れが心地よく、想像していたよりもずっと親しみやすく感じました。

生命健康科学部１年男子（抜粋）

まず、舞台が大学の中庭であったのは非常に印象的だった。普段、学生や職員が通り過ぎるだけの空間に、野外の能舞台が出現したことで、伝統文化が私たちの日常にグッと近づいてきたように感じた。照明が控えめな分、そこでしか感じられない生々しい雰囲気や、昔ながらの芸能の持つ、ありのままの姿を直接体感できたように思う。風の音や遠くの建物も、かえって舞台の一部になっているようだった。

第一部の一節切と狂言の対比は非常に面白く、発見の多いものだった。一節切の解説から、この短い竹笛が、かつては高貴な人たちの教養だったものが、時代を経て庶民のお酒の席での流行歌へと変化していった歴史がよく分かった。古典的な曲と俗曲が続けて演奏された後に、その庶民的な流行歌が、狂言師による動きと声を通じてユーモアへと変わる。流行歌が狂言の題材になる様子は、芸術の形が違ってもお互いに影響し合っていることを示しており、江戸庶民の持つ豊かな遊び心や生命力を、時空を超えて肌で感じることができた。狂言で見せた酔っ払いの表現は、笑いを誘うだけでなく、伝統の型の中に現代にも通じる普遍的なリアリズムが生きている証明のように思えた。

第二部の能楽の上演では〈中略〉その厳粛さと重みに全身で圧倒された。狂言の明るさとは一線を画し、舞台には張り詰めた静寂と緊張感が漂っていた。能の主役の、ゆっくりとした足運びやわずかな手の動き、そして地謡から伝わる重厚な響きは、映像や活字では決して理解できない特別な体験だった。特に野外の夜という環境が、舞台の持つ静謐さと神秘的な雰囲気を際立たせていた。

※学生の感想は、いずれも原文ママ

相良保之氏の飛び入り演奏

名市大一節切尺八愛好会の方々

三っ音会の三味線

囃子方と地謡（能）

主役（シテ）は天女

自然が彩る能舞台

能の脇役（ワキ）

多数の学外見学者が来場

４. 日本伝統文化講座

⑴　春学期：「日本の歴史と文化」

春学期には、全学共通教育科目「日本の歴史と文化」の中で、伝統文化講座の授業を行なった。本授業は、さまざまな伝統文化に触れることを目的としており、各テーマのプロフェショナルに講師を務めていただくことで、オムニバス形式の授業を展開している。日本舞踊については西川千雅家元、能楽に関しては久田勘鷗師（久田三津子師）、茶道は表千家今日庵の谷口剛久先生に各テーマの魅力をご教授いただいた。このほか、学内の専任教員である井上徳之教授と岡本聡教授、非常勤講師の樗木宏成氏も共に体験型の授業を実施した。

（春学期）日本の歴史と文化

テーマ	講師（敬称略）	実施日
ガイダンス	井上徳之	4/11・4/25・5/9
能楽	久田勘鷗(久田三津子)	5/2・6/6・7/4
日本舞踊	西川千雅	5/16・5/30・7/11
茶道	谷口剛久	4/18・6/13・6/27
俳句	樗木宏成・岡本聡	5/23・6/20

俳句の実作

茶花の実演（茶道）

日本舞踊の実演

⑵ 秋学期：SDGs プロジェクト科目（お稽古）

秋学期には、SDGs プロジェクト科目「クロスオーバーSDGs」に、さまざまな伝統文化のお稽古と講義を絡めて授業を行なった。本科目は人文学部学生を対象としたもので、日本の伝統文化を海外に紹介するため、学生自らが体験し、動画の制作に活かしていくというものである。お稽古は昨年度に引き続き、日本舞踊を西川まさ子先生、能楽を久田三津子先生・梅若紀佳先生にご指導いただいた。また、今年度は新たな体験活動として、伊勢型紙の制作工程を応用したペーパークラフトを山中良子氏にご指導いただいた。本科目を通して、伝統文化をあらゆる分野・領域で活かしていく素材として昇華することが期待できる。

（秋学期）「SDGs プロジェクト科目」でのお稽古等

テーマ	講師	実施日
能楽	久田三津子・梅若紀佳	10/17・11/28・12/12
日本舞踊	西川まさ子・西川豊代乃・西川カーク	11/7・11/14・11/21・1/9
伊勢型紙	山中良子	10/24

西川カーク先生による初座学

能の仕舞

日本舞踊お稽古

すり足の稽古

コラム　「花鏡野外能」における能面展示
～文理融合大学の強みを活かして～

今回「花鏡野外能」と共に実施した能面の展示は、中部大学が強みとする「文理融合」を活かした展示となった。面（おもて）※1は一見すると無表情のようだが、その角度によってほほえんだり、悲しんだりしているように見える。このような面の特徴を表現するため、3Dプリンターを活用した専用の展示台を制作した。設計した展示台は【参考】のようなもので、土台となる部分の角度を変えることで上下に首振りが可能となる。イベント当日は、この土台に発砲スチロール製のマネキンを取り付けて、能面を装着したものを展示した。上記の制作には、プロジェクトメンバーの高丸尚教教授と樗木宏成氏が携わり、教育技術部より加藤和則部長にもご協力をいただいた。また、能面の準備とキャプションの作成は「日本伝統文化探究会」の学生たちが担当し、教職員と学生が学部を超えて協力し、当日に向けた用意を行なった。

当日は「花鏡野外能」におけるご挨拶で、辻本プロジェクト長から案内をいただいたこともあって、能面展示には多くの人が殺到した。見学者の方々は、スマートフォンで撮影するなど各々に楽しんでおられ、イベントを盛り上げる一企画となった。

上記の展示方法は、展示台（土台）にモーターをつけることによって首振りを自動化することや、鬘や襟元の装飾で更なるリアリティを醸し出すことが期待できる。今後も文理融合大学の強みを活かした新たな試みを通して、本プロジェクトの活動を魅力あるものにしていくことが期待できる。

※1　能面のことを専門用語で、「面」（おもて）という。

【参考】制作した展示台

将来的には、「日本伝統文化探究会」の学生企画や、本学の民族資料博物館での展示に活用が期待できる。

能面展示の様子

５. 共催・協力事業

⑴ 源氏物語屏風・講座（中部大学アクティブアゲインカレッジ）

9 月 26 日（金）、10 月 3 日（金）に名古屋大学名誉教授の高橋亨先生により、本学所蔵の 2 点の源氏物語屏風について講座を行なっていただいた。9 月 26 日には源氏物語屏風六曲一双の小屏風（江戸時代中期、無銘）の説明のほか、そこから派生した源氏物語全般の中での絵の位置づけなどについて、また 10 月 3 日には、土佐光貞筆の源氏物語銀地屏風大屏風、六曲一双（江戸時代後期）の説明をしていただいた。海外での源氏物語展の話など、多くの屏風絵から派生した話をしていただき、受講生の方々も大変興味深く聞き入っておられた。

源氏物語屏風と高橋亨先生

⑵ 着物の着付け講座

2025 年度も引き続き、「きもの・日本文化伝える会 つるさん 亀さん」の中島恵美子氏、太田明子氏に講師を依頼し、春学期 4 回、秋学期 8 回の着付け講座を開催し、延べ 92 人の学生が参加した。今年度も春学期は浴衣の着付けを学び、秋学期は小紋や紬等の着付けを学んだ。人数の増加や男子学生の参加もあり、場所の確保などに多少の苦労があったが、学生相互の協力によって、実りある講座となった。上級生が少しずつ下級生のフォローができる様になり、中長期的活動への展開が見えた 1 年であった。

着付け講座（イメージ）

６. 学園活動

⑴ 春日丘中学校「江戸時代の連句を巻こう」　（中大連携）

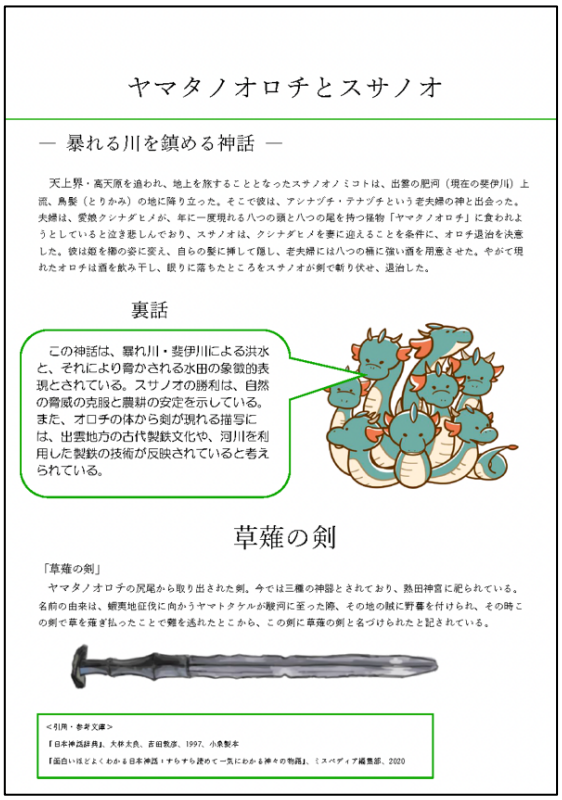
併設校である中部大学春日丘中学校との連携活動として、中大連携を実施した。この活動には生徒が伝統文化に触れる機会があり、江戸時代の連想ゲーム「連句」について、岡本聡教授が学生 Teaching Assistant（TA）らと共に遊び方を指導した。7 月 9 日（水）に実施した事前授業では、日本語日本文化学科の有志学生が制作した連句の解説動画を活用し、樗木宏成（博士特別研究員・非常勤講師）が授業を行なった。8 月 22 日（金）、25 日（月）、26 日（火）に洞雲亭で実施した活動では、連句の実作・茶道体験・けん玉などの伝統玩具によるレクリエーションを催した。今回実作したのは、24 句で 1 作品の形式をとる「短歌行」である。中には連想に行き詰まる生徒の姿もあったが、その際は TA のサポートを受けて課題の達成を目指し、学びの成果を啓明祭（9 月 20 日開催）で発表した。また、TA を務めた学生たちも、生徒の指導を通して「連句に対する学びを深めることができた」という意見があり、大学生と中学生が相互に学びを深める機会となった。

実作の様子（8 月）

TA と共に課題を達成

⑵ 日本伝統文化プロジェクト室の活用

10月20日（月）～30日（木）まで、日本伝統文化プロジェクト室において企画展「家庭崩壊から始まる日本神話」を実施した。この展示は日本文化を学び、その魅力を広めようとする学生の自主的な活動団体「日本伝統文化探究会」が催したもので、今年度に加入した1年生が主導となって企画したものである。展示では天照大御神（あまてらすおおみかみ）、建速須佐之男命（たけはやすさのお）、月読命（つくよみ）の三兄弟に焦点を当て、神話における神々の活躍を調査してパネルにまとめた。



ヤマタノオロチとスサノオ

— 暴れる川を鎮める神話 —

天上界・高天原を追われ、地上を旅することとなったスサノオノミコトは、出雲の肥河（現在の斐伊川）上流、鳥髪（とりかみ）の地に降り立った。そこで彼は、アシナヅチ・テナヅチという老夫婦の神と出会った。夫婦は、愛娘クシナダヒメが、年に一度現れる八つの頭と八つの尾を持つ怪物「ヤマタノオロチ」に食われようとしていると泣き悲しんでおり、スサノオは、クシナダヒメを妻に迎えることを条件に、オロチ退治を決意した。彼は姫を櫛の姿に変え、自らの髪に挿して隠し、老夫婦には八つの桶に強い酒を用意させた。やがて現れたオロチは酒を飲み干し、眠りに落ちたところをスサノオが剣で斬り伏せ、退治した。

裏話

この神話は、暴れ川・斐伊川による洪水と、それにより脅かされる水田の象徴的表現とされている。スサノオの勝利は、自然の脅威の克服と農耕の安定を示している。また、オロチの体から剣が現れる描写には、出雲地方の古代製鉄文化や、河川を利用した製鉄の技術が反映されていると考えられている。

草薙の剣

「草薙の剣」

ヤマタノオロチの尻尾から取り出された剣。今では三種の神器とされており、熱田神宮に祀られている。名前の由来は、蝦夷地征伐に向かうヤマトタケルが駿河に至った際、その地の賊に野焼を付けられ、その時この剣で草を薙ぎ払ったことで難を逃れたとこから、この剣に草薙の剣と名づけられたと記されている。

＜引用・参考文献＞

『日本神話辞典』、大林太良、吉田敦彦、1997、小泉製本

『面白いほどよくわかる日本神話！すらすら読めて一気にわかる神々の物語』、ミスペディア編集部、2020

【参考】日本神話に関する展示内容（一部）

⑶　中部大学祭への出展

10月31日(金)～11月2日(日)開催の中部大学祭に「日本伝統文化探究会」が出展した。本活動では、伝統玩具（けん玉・コマ・双六・花札）の体験活動をはじめ、本学に寄贈された能面や、前述した学生企画「家庭崩壊から始まる日本神話」における学びの成果を紹介した。学祭中は12名の学生が交代で見学者の対応を行い、終始盛況を博した。見学者の中には、外国の方や花札体験を目的に連日参加してくださる方がおり、多様な人々と交流する機会を得ることができた。

学祭における案内掲示板

7．学外活動

⑴「えなしこどもフェスタ2025」への出展

7月26日（土）～27日（日）の2日間、恵那文化センターで開催された「えなしこどもフェスタ2025」に、「日本伝統文化探究会」の学生14名が伝統玩具に関するブースを出展した。本活動では、小学生とその保護者を対象に、けん玉やコマの体験活動を実施し、能面の展示も行なった。参加学生は、子どもたちの目線に合わせて交流するといった工夫をしており、日本文化の普及を通してコミュニケーション能力の向上を図ることができた。

子どもの視点で対応

子どもの興味を探る

一緒に折紙

子どもに人気の面を発見

教えるため練習

⑵ 恵那市立長島小学校での教育サポート活動

12月8日(月)、恵那市立長島(おさしま)小学校で伝統玩具を用いた授業が実施された。本授業は、1年生3クラスを対象に、1～3限目を利用して行われたもので「日本伝統文化探究会」の学生8名が活動をサポートした。体験活動では、めんこ・コマ・竹とんぼ・お手玉・けん玉の5種類の遊びを地域ボランティアと共に教えた。学生たちもボランティアの方々から教えていただく場面があり、多様な年齢・立場の人々が良い刺激を与え合う機会となった。また、「生徒がお礼の歌を歌ってくれたのが嬉しかった。」と感想を述べる学生もおり、社会貢献の意義を実感として学ぶことができたと言える。

コマ体験

けん玉体験

地域ボランティアの方々と活動をサポート

お手玉体験

⑶ 全国大学俳句選手権大会

犬山市で開催された第８回全国大学俳句選手権大会（鈴木しづ子顕彰プロジェクト実行委員会）において、中部大学から３名の作品が受賞した。入選句と氏名、受賞の種類は、次のとおりである。

受賞者の二人（百瀬・増田）

入選句	氏名	受賞名
汗光る言葉より先肩を組む	増田　蔵之心	準グランプリ
星月夜進路描けず長電話	百瀬　仁那	俳句てふてふ賞
麦秋や髪色変われど君のまま	堀　心海	審査員特別賞

８. プロジェクトメンバー

プロジェクト長	辻本 雅史（顧問）
人間力創成教育院	梅嵜 周毅（学生部長・教授）
生命健康科学部スポーツ保健医療学科	伊藤 守弘（教授）
理工学部 AI ロボティクス学科	高丸 尚教（教授）
人文学部日本語日本文化学科	嘉原 優子（教授）
人文学部日本語日本文化学科	岡本 聡（教授）
人文学部日本語日本文化学科	小森 早江子（教授）
超伝導・持続可能エネルギー研究センター	井上 徳之（教授）
理事・事務統括本部長	垣立 昌寛
学事部次長	永平 三喜
国際・地域推進部課長	可児 俊典
人文学部事務室事務長	松田 博行
（プロジェクト庶務）	人文事務室
博士特別研究員・非常勤講師	樗木 宏成

オブザーバー参加学生

人文学部日本語日本文化学科	鈴木 花音（２年）
人文学部日本語日本文化学科	林 ななみ（２年）

編集後記

本プロジェクトも７年目を迎え、2025 年度も無事すべての活動を終えることができました。ひとえに皆様のおかげであり、関係者の方々には深謝の意を表して、報告書をお届けいたします。

例年と同様に、日本伝統文化推進プロジェクトにおける催しの様子は、本学のホームページで動画を公開しております。また、来年度のイベント情報に関しても、随時告知させていただく予定です。ぜひ、ご覧ください。

樗木宏成

（監修）辻本雅史
（編集）樗木宏成・林ななみ

日本伝統文化推進プロジェクト　2025 年度活動報告書
編集・発行　中部大学日本伝統文化推進プロジェクト
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地
中部大学　人文学部事務室
TEL 0568-51-4144